

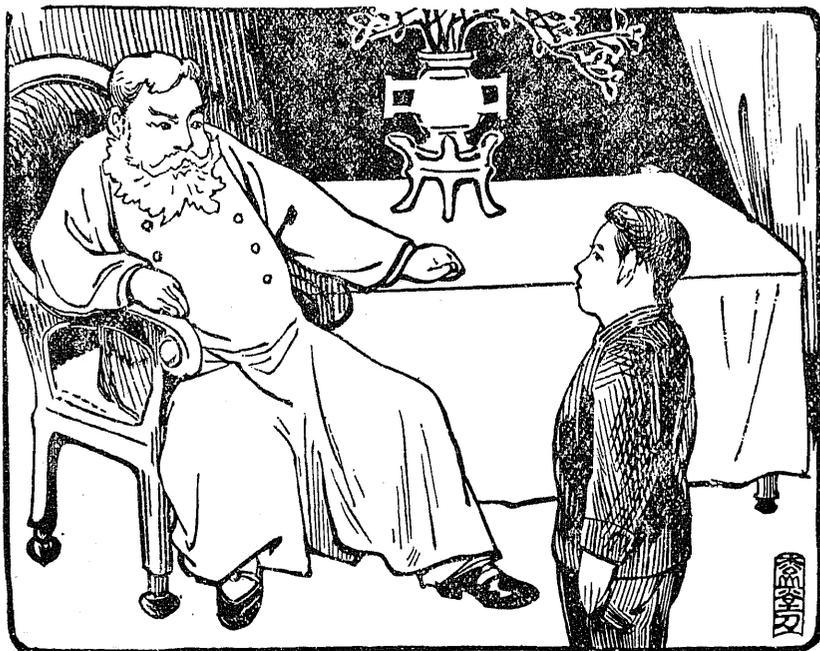
お話大臣

太田英隆譯

第一 王様の冗話好き

むかし、西洋のある國に、大層冗話好きな王様が
 がありました。若し、一日でも冗話を聞かない日
 がありませんと、その日は一日不愉快で、堪まらな
 いと云ふほどであります。それで、お話する人は
 代はる／＼宮中に入りして、一日も断へたこ
 とはありません。けれども、何分長い年月のこと
 でありますから、お話する人を抱へるのに、だん
 ／＼困つて来るやうになりました。

そこで、王様は全國到る所に、お話の上手なも
 のは、誰でも早速宮中に申出よと云ふやうな公
 告をいたしました。すると、お話の上手な人はか
 り、われも／＼と申出ましたが、つまり其中で、



王様のお話役に、抱へられることになつたのは、花太郎と申す、若かい人でありました。

この花太郎と申します人は、年こそ若ければ話の方にかけては、それはく大したもので、もしこの人が、可笑い話をすれば、甚麼人でも腹を抱へて、臍が宿換へするほどわらひ、悲しい話をすれば、兩方の袖を絞るほど涙を出さぬ人はないと云ふ位上手であります。

この花太郎が、これから甚麼お話を王様に申し上げますか、皆さん、これからが見ものですよ。

第二 花太郎の奇譚

さて花太郎は、いよく王様の御前で、お話し申し上げることになりました、次にあるやうな不思議な事を語り出しました。

王様よ、私がこれから説き出す話説は、今から恰

度八十年前に在つた、世にも奇妙な事で、いいます。ある所に文雄と申す教員が一人ありました。この文雄は、いたつて釣が好きでありましたから、休日にはきつと魚釣に出かけます。

ある日曜に、例の通り釣道具を持つて、圓山川と申す河に釣に参りました。その日は、何時もよりは魚が澤山釣れまして、文雄も大そう喜んでその魚を數へてゐますと忽然その目の前に妖怪が顯はれたのです。その妖怪の身の丈の高さは二丈もあるかと思はれ、眼の大きさは鏡の如く、銀のやうに光つて顔の真中に一つあります。而して雷のやうな大きな聲を上げて

『爾は何故に俺の弟子を澤山殺すか、今は容赦ならぬ、俺爾の首を斬つて弟子の仇を討つから、早く前に出て覺悟しろ。』

と眼を睜いて叫びました。文雄は先程から、白くなつたり蒼くなつたりして、生きた心地はありませんが、今妖怪が、俺を殺すと云つたのを聞いて、慌忙ながら妖怪に對ひ、

『俺は、あなたの弟子は一人も殺しはいたしません、それは人違ひでありますから、俺の命だけは切望助けて下さい。』

と云ひますと、妖怪は、又大聲を上げて、

『人違ひではない、僕は時々この河に來て、俺の弟子を澤山殺すではないか、今も多くの弟子を殺してゐながら、人違ひとは何だ。』

と叱り附けますが、文雄は何の事やら少しも解りません。そこで恐るゝ

『俺は、この河には魚釣に參りますか、まだあなたの弟子を殺したことはありません、それは何か

の間違ひではありますまいか。』

と尋ねますと、妖怪は頭を打ち掉り

『いや、左様は云はせない、現に今澤山の魚を殺して持つてゐるではないか、この河には、俺の弟子が、日曜日ごとに遊び廻つて、この淵に來るのを、皆僕が釣つて殺すのである。俺の弟子と他の魚とは、頭に圓い斑點があるからよく知れる。』と云ひますので、よくその頭を見ますと、いかにも頭に圓い光つた斑點があります。それにしても、何故この妖怪が、この魚の主人だか理由が解りませんので

『それでは、あなたはこの魚の、親方でありますか。』

と尋ねますと、妖怪は

『俺は、この河の王である。而してその魚は魚の

中の智識のあるのを探んで、頭に圓い印を附けて、俺の召使としてゐるのである。それに俺は殺してしまふから、今日は仇を討つのだ。』

と云つてなかく聞入れる様子はありませぬ。文雄は悲しみながら

『俺は、そんな事とは少しも知りませぬ、ただ普通の魚だと思つて釣つたのですから、お慈悲に命だけは助けて下され。』

と頼みしに、妖怪は再び文雄に對ひ、

『俺は慈悲の心は少しもない、それで俺は宥すことは出来ないから、是非とも殺すによりて覺悟をせよ、都て人を殺したものは、又其身の殺されると云ふことは、天地の公道であつて、妄りに濠へることはならぬ。いかに俺が言を並べたとて、無益であるから、怎爲死ぬなら早く死ぬかよい。俺

が命は貰つたよ。』と云ひながら、大木の如き手をさし伸べ、首筋無手とつかみ大地へ動と投げ倒しました。大地に復仆つた文雄は、起き上る勇氣もなく涙を雨の如く出し。兩手を合せ聲を震はせて『开は餘り聞き分けない、俺が殺されたら後で悲嘆く人がありますから、惘然と思つて助けて下され。』

と頼みましたが、妖怪は少しも聞く様子なく聲を一層大きくして

『今になつて甚麼に泣いても、俺の弟子が蘇生て來なければ、俺の罪は消へないから、宥すことは出来ない、何の道死ぬ命なら、快よく死ぬよ。假令無罪の者でも、俺が一旦殺さうと思つたなら必然殺さずには居られぬ。まして罪ある俺を、什麼して助けて置くものか。』

と太刀を振り上げて、一討と斬りかけました。こゝまで語り來りしとき、花太郎は王様に對ひ、
 『王様よ、これにて私の今日の役目だけは済みましたから、この話續きは、明日いたしますことにして、今日はこれで御免被ります。』といつてお話をやめました。(つづく)

指輪の遊び

其一

七八人で、輪を作つて、一筋の紐に指輪を通して其紐の兩端を結んで輪にして、各自夫を兩手で握つて、アチラコチへしごいて居る、指輪は、夫に従つて、又アチラコチラへ回り歩いて誰の手に居るか分らない様にする。そして、真中に一入居て此人の手に指輪が這入つて居ると思ふと、其人の

手を捕へる。あけて見ないといふと、又始める。お仕舞ひに捕はつた人が真中に出て、其番に當るといふお遊び。

其二

矢張り同じ程の人数で輪を作つて兩手を擴げて膝の上に置く。真中に一人指輪を持つて、周圍の人の兩手を指輪持つた手で軽く叩いて行くと、叩かれた人は、皆手の掌を握る。そして誰か其中の一人の手の掌に指輪を置いて行く。そうすると、指輪は、誰の手の中に握られて居るか分らない。そこで、他の人が一人出て、『誰さん』といつて、指輪を握つた人を言ひ當てるのです。若し當て損ねたら、其人は罰として何か藝をやらされる。

潮干とさゞえ